

# 私の水中写真家としての原点

写真/文 鍵井晴章



私は水中写真家になって、今、こうして生活していくことに何の疑いも持っていなかった。どうしてそんな自信があったのかわからない。もちろん、そんな夢の実現を裏打ちする理由は何ひとつなかった。最近、ある雑誌のインタビューで、自分史のようなものを振り返ってみる機会があった。そして、答えが見つかった。「ただ、ただ僕は世間知らずだった」ということ。インタビュアーの方も、その答えを導いた時、冷笑していた。知らないというは、怖いことだけど、もうこうなってしまえば、なんか心強いというか…(笑)。もうひとつ

私が幸せだったことは、早くして、好きなことを見つけること。水中写真と知り合ったのは20歳のころだけど、それほど、回り道せずに自分のなりたい仕事に出会えた。水中写真家という職業。飽き性の私が約10年以上も続けて来たのだから、天職とは言わないまでも、適正だったに違いない。

1993年に水中写真家・伊藤勝敏氏のアシスタントとして初めて西オーストラリアのエクスマスに訪れた。目的は現存魚類最大の魚・ジンベイザメ。ダイバーをはじめ、多くの人を魅了している憧れの生物。私は、それまでにジンベイザメを見たことや泳いだ経験などなかった。しかし、あのオーストラリアという大地では、いきなり出会えたジンベイザメを当然のように受け止めていた。スケールの大きなオーストラリアでは何が出てきても不思議ではなく、私自身もその自然のスケールに影響されていくのを感じた。翌年の1994年、23歳の時に今度は現地スタッフとして、再度、エクスマスに訪れた。そして約2ヵ月半、毎日ジンベイザメを見つけては先頭で泳ぐスポッターとして働きながら、撮影に取り組んだ。水中写真家を志し、初めて本格的な撮影を行ったのがジンベイザメ。そして、私はジンベイザメを通して世界の広さを知ろうとしていた。ジンベイザメは、私に海の素晴らしさを教えてくれたキッカケでもあり、私の水中写真家としての原点となった。

青いヴェータ **Photo Column** 02